叫ぶと共に王政の復古に熱中す。かるが故に爾後幕府の有司さては幕府の存在を否定せざる開國遠略論者は、開國論を唱へて佐幕に傾き（佐久間象山、横井小楠、大槻磐溪の如きこれなり）諸藩の志士浪人等にして幕府の存在を否定せる開國遠略論者は、攘夷論を唱へて倒幕（後ち遂に討幕に變ず）に傾く（薩長土三藩を始め諸藩に於ける激派の領袖の如きこれなり）蓋し自然の勢なり。

要するに水戸學派等の主唱せる攘夷論は手段にして目的に非らず、前提にして同時に結論たるに非らず、又支那思想の影響を主體とする排外の說に非らず、況んや又鎖國因循の保守論に非らず、無意義の戰端を開かんとするの暴論に非らず、天下萬世の爲めに尊嚴なる國體を擁護し、完全なる國家統一の大業を爲さんとする最も進歩したる意見なりきと謂ふべきなり。

（附言）安政開國前後の際に於ける水藩の行動主張に至りては、なほ特に細說を要するものあれども、之を他日に期せんとす。

弘法大師の入定說に就いて

文學博士　喜田貞吉

緒言

弘法大師は死んだのではなくて、其の實高野山の岩窟で入定して、生身のまゝに龍華三會の五十六億七千萬歲の後を待つて居られるのだとの說が古くからある。大江匡房の本朝神仙傳に、

弘法大師……後於金剛峯寺入金剛定、于

今存焉。初人皆見鬚髮常生、形容不變。穿山頂、入底半里許、爲禪定之室。

とある。同じ人の弘法大師讃にも、

初證三二地、後遺全身。入金剛定、昇摩尼輪。

とある。匡房は天仁二年に七十一歳で死んだ人であるから、右の如き入定説は、大師入滅後遲くも二百四五十年の頃には、既に立派に成立して居たものであることが知られる。更に匡房よりも稍年長者であつた經範（長治元年歳七十四）の大師御行狀集記を見ると、一層詳細の記事がある。

傳曰。告弟子曰、我有厭世之思、欲遂本懷。既明年三月之中也。汝等挑法燈、可護秘藏。是報佛恩、報師恩之計也。云々

有書曰、方今諸弟子諦聽諦聽。吾生期今不幾、仁等好住、愼守教法。吾永擬入定者。今年三月二十一日寅尅。諸弟子等莫爲悲泣。

吾則滅而歸信兩部三寶。自然代吾被眷顧。是亦定理也。吾生年六十二、（一本千字ナシ）法臘四十一。吾初思、及千一百歳住世、奉護教法。然而恃諸弟子、急永擬卽世云々

或傳曰、然則從大寺艮角。入三十六町、卜入定處、從兼日營修之。其期兼二十日。四時行法。其間御弟子等、共唱彌勒寶號。至時尅止言語、結跏趺坐、住大日定印、奄然入定。時年承和二年、乙卯三月二十一日丙寅之時也。雖閉目、自餘宛如生身。及七々御忌、御弟子等皆以拜見。顏色不變、鬚髮更生。因之加剃除、懃衣裳、疊石築壇、覆其上、……

或書曰、御入定所爲令造築墓、依勅賜營作料。從（後の誤）太上天皇有弔書、曰、眞言法匠、密教宗師、邦家憑其護持、動植荷其攝念。豈圖奄慈父（未の誤）逼無常等云々。末代弟子竊以、月支

迦葉、隱形於鷄足、受應化付囑。期慈尊出世。日域吾師、藏身高野、傳法身秘敎、待龍華三會云々

大師告示御弟子曰、有書曰、吾入定後必往兜率他天、可待彌勒慈尊出世、五十六億餘之後。必慈尊下生之時、出定祇候。可問吾先跡。亦且未下之問、見微雲管、可察弟子信否。是時有勤之者得祐、不信之者不幸。努力々々、勿爲後跡云々

卽ち大師は豫め入定を覺悟し、生身のまゝに彌勒出世の曉を待つて居るのだと言ふのである。隨つて大師は無論其の肉身を保存し、顏色變ぜず髮も成長するといふのである。更に同書にはこんな事まで見えて居る。

醍醐帝御宇延喜年中、……或說曰、依帝皇御夢想、以僧正觀賢被祈請。重依有夢想、隨其感應、開御入定巖窟、奉見顏色。只如例人。思往昔色像如此歟。僧正觀賢並勅使、凡可奉見之人、皆拜見。然加剃除、懃御法服、如本奉埋藏已了。其子細奏聞公家了云々

或說曰、觀賢僧正有祈誓感應。蒙官裁、開御入定巖窟、欲拜見之處、奥院降臨雲霧、宛如黑暗。比肩列座之輩、纔雖聞音聲、無見體相。上下道俗、成怖畏、奉念三寶。爰僧正觀賢、恥罪障之深、屢致無量之懺悔。其後漸々散雲霧、既奉拜見御入定之寶體。宛如睡人。無敢衰容色。然勅使等皆奉禮拜、欣悅無極。次奉剃御髮、奉着法衣。如本奉藏收畢云云

入定と云へば死んだのではなく、肉身のまゝに禪定三昧に入つたのであつて、たとへ百千萬億年を經ようとも、其の肉體は腐敗分解してはならぬ。隨つて大師が、後までも結跏趺坐のまゝで巖窟內

に睡つて居るとの説の出るのも、無理のない次第で、大師は此の狀態のまゝに彌勒の出世を待つて、再び定を出でられるべき筈なのである。卽ち此の娑婆世界に於て、五十六億餘歲の彌勒の出世を待つて居る譯で、彌勒淨土の兜率天に往生するのではない。此の意味に於ては、前引行狀集記の文に「吾入定後必往兜率他天、可待彌勒慈尊出世」とあるのは、矛盾の感がないでもはいが、是は肉體を其まゝに高野山上に止めて、其本體なる靈魂は兜率天に往生し、彌勒出世のお伴をして、再びもとの肉體に戻り、定を出づるといふ意味に解すべきものである。而して此の後に現はれた傳記に至つては、孰れも此の入定説を祖述しないものはない。而して此の意味に於て、高野山は信徒のある特別の信仰を惹いて居るのである。

併しながら弘法大師とても同じく人類である。人類として豈に死なからんやで、彼亦普通の人類と同じく、病氣によつて往生を遂げ、殊に荼毘の儀によつて葬式を行ひ、遺骨を豫め點定して置いた場所に藏めたのであつた。此の事は當時の史料明かに之を證して居る。然るにも拘らず、後に入定不死の説の起るに至つたのは、大師が偉人として崇敬せられた結果であつて、斯くの如き奇蹟談は他の高僧にも往々にして傳へられ、敢て不思議とするにも當らぬのではあるが、而も特に此の大師入定説に就いては、其の説の由來變遷する所に頗る面白い沿革がないでもない。乃ち是を以て奇蹟談發生の一例として、左に稍詳に其の經路を觀察して見たいと思ふ。

二　弘法大師の入寂

弘法大師が死んだのであるとか、或は死んだのでは無いとかいふことは、固より史學上の問題ではない。又宗教上の信仰からして、其死を入定と信ずるに至つた事實に就いても、固より之を否定す

るに及ばぬ。併しながら、大師死去當時に於ては勿論、少くも死後約六十年の後に至るまで、其の死が遺弟同門の人々に於ても、立派に認識せられて居たに拘らず、後に至つて此の入定說を生ずるに至つたに就いては頗る興味ある沿革を有するものである。

大師の死は立派に續日本後紀に見えて居る。曰く

丙寅〇承和二年三月二十一日大僧都傳燈大法師位空海、終二于紀伊國禪居一。庚午〇同二十五日勅遣二內舍人一人一、弔二法師喪一、並施二喪料一。……

法師者讃岐國多度郡人、……七年〇天長轉二大僧都一。自有二終焉之志一、隱二居紀伊國金剛峯寺一。化去之時年六十三。

卽ち大師は紀伊の禪居に終つたのであつて、天子喪を弔し給ひ、喪料をも賜はつたのである。殊に其の葬式は火葬であつて、大師の遺骸は忽ちもとの四大に還原されたのであつた。淳和上皇の弔問の勅を記して、

後太上天皇有二弔書一、曰、眞言洪匠、密敎宗師。邦家憑二其護持一、動植荷二其攝念一。豈圖崦嵫未レ逼、無常遽侵。仁舟廢レ棹、弱喪失レ歸。嗟呼哀哉。禪關僻在、凶聞晚傳、不レ能二使者奔赴一、相二助茶毘一。言之爲レ恨、悵悼曷已。思二忖舊窟一、悲涼可レ料。今者遙寄二單書一、弔レ之。着錄弟子、入室桑門、悽愴如何。兼以達レ旨。

とある。此の御弔書によれば、大師が火葬によつて葬れたのであつた事が、明かに知られるのである。然るに入定說を主張する側から云へば、右の文は頗る其說の妨害となるべきものであるから、前引行狀集記の如きは、「無常遽侵」以下の全文を削つて、「無常等云云」の五字に隱し、更に「末代弟子」以下の文を附加してある。彼の元亨釋書の如きも同じく入定說を傳へるが爲に、「仁舟廢棹」以下の全文を削つて、「遽馳二草書一、弔二慰大定一」の八字に

改めてある。是等は確かに悪意ある改作と云はれても辯解の辭なかるべきものと思はれる。

尙其の火葬を裏書すべく、後までも廟堂の邊に炭灰などが殘つて居つたといふ事實があつたらしい。而してそれによつて大師が火葬に附せられたといふ説も唱へられて居たらしい。是に就いては紀伊續風土記高野山之部の、開山傳譜に之を辯じて、

さても大師の御入定といふこと、誠に小國末代に取つて比類なし。其に就て或俗生の申すには、「大師の入定と云は疑あるべし。外記の日記にも更に見えず、只世の常の人入滅せしよふ、火葬にし奉りたりや、御廟堂の邊炭灰など殘れり。又公家より葬料を送らる」となん云とも、此事僞りにあらず。大師自吾入定すと註し置給ふ事明なり。外記日記などに見えぬ事さも侍らん。此は秘事にて、親き門徒の外は知ぬ事にて、世の常の入滅に擬して、御弟子達も其の由にもてなしければ、左も申しつらん。炭灰殘りけるは、御入定の後暫くは番になりて、御廟院を守護し奉りけり。（高野物語要集了引扶桑略記行化記等。御入定期決記に此等の條詳明なり今略す。）

と、可なり苦しい説明を試みて居る。右の引用書は、行化記以外は未だ親しく之を調査するの機を得ぬから、所謂俗生の説が何時頃に唱へられたものかは不明であるが、いづれ入定説成立した後のもので、而も炭灰などがなほ存したとあれば、さう後のものではない。こゝに外記日記とは、續日本後紀勅撰の材料となつたもので、其の時代のものは後世に傳へられて居らぬ。然るに右の説には、大師の入定を疑ふに就いて、其の根據を流布の續日本後紀に求めず、更に其の根本史料たる外記日記を引いて居るのは、此の俗生なるものゝ説が、まだ續日本後紀流布以前、恐らくはまだ其の材料な

る外記日記が殘つて居つた頃に、之を見て言ひ出されたものらしく、相當古い時代の說であつた事が知られるのである。尤も古代の火葬は、臨時に竈を築いて、薪を積重ねて屍體を燒いたのであるから、比較的後までも炭灰は遺殘し得べく、隨つて稍下つた世になつても、其の存在を見て、入定說に取つては可なりの傷手たるべき右の說が起つたとしても無理はない。而して之に對する辯明は、大師は其の實入定せられたものなるも、便宜上普通の死の如く裝つて之を世に發表したので、親しき門徒の外は之を知らなかつたのだと云つて居るのである。是れ併しながら不自然千萬の事であつて、其の祖師を顯彰せんとする弟子達の所行としては、極めて受取り難いとだと言はねばならぬ。殊に其の親しき弟子達も、其の實明かに大師の死を云つて居るのであつて、右の辯解は到底成立すべからざるものである。

遺弟眞濟が大師入滅の年の十月二日に書いたといふ空海僧都傳には、

承和元年五月晦日、召二請弟子等一語、生期今不レ幾、汝等好住、愼守二佛法一、吾永歸レ山。九月初自定二葬處一。二年正月以來、却絕二水漿一。或人諫レ之曰、此身易レ腐、更可二以(マヽ)鳧爲レ養。天厨前外列、甘露日進。止乎止乎、不レ用二人間味一。至二于三月二十一日後夜一、右脇唱滅。諸弟子等一二者悟搖レ病。依二遺敎一奉レ斂二東峯一。生年六十二、夏臘四十一。

と書いてある。此の文で見れば、大師は病床に安樂な往生を遂げたのであつて、決して生きながら巖窟に入定せられたのではなく、葬儀も亦豫定通りに行はれて居るのである。當時の葬儀が普通火葬であつた事は、靈異記を見てもほゞ其の有樣が察せられる。此の書記する所、時に土葬の例がないではないが、其の場合には必ず特に土葬にした

理由を書いてあるのを見ても、以て當時の風潮が察せられよう。斯くて淳和上皇の如きに至つては、管に御遺骸を荼毘に附せしめられたのみならず、其の御遺骨をも粉碎して之を山中に散布せしめ、山陵を起す事すらお止めになられた程であつた。此の際に於て大師の葬儀が、亦荼毘の法によつて行はれたであらうといふことは、淳和上皇の御吊書にたとひ「荼毘」の文字がなく、廟堂の附近にはしや炭灰が殘つて居なくとも、容易に推測し得られる事であらう。

此の年十月嵯峨上皇が「哭二海上人一」の御製の詩を賜はつた。其の中に、「化身往世何能久、塵界定留二恵遠名一、縕侶古來以爲レ樂、凡夫徒自感二傷情一」とか、「從レ此津梁長已矣、魂兮何處救二蒼生一」などいふ御句がある。是れ實に大師の死を悼まれたもので、之に對する遺弟實慧の謝恩の表にも、

今月七日伏奉二御製手札一。哭二先師一之詩、宸章高臨、照二曜下土一。生死榮寵、永傳二無窮一。悲幸々々。

の語があるのである。卽ち先師は其の生前のみならず、死後の榮寵を辱うしたのである。更に同人が翌承和三年五月に唐の青龍寺の門侶に遣はした書には、

和尙卜二地南山一、置二一伽藍一、爲二終焉之地一、其名曰二金剛峯寺一。以二今上承和元一、去レ都行住。二年季春、薪盡火滅。行年六十二。嗚呼哀哉。南山變レ白、雲樹含レ悲。一人傷悼、吊使馳喪。四輩嗚咽、如レ哭二父母一。嗚呼哀哉。實慧等心同呑レ火、眼若二沸泉一。不レ能死滅、守レ房終焉。……

ともある。其の當時に於て大師の死は、何等の疑義なく公表せられ、入定の如き説は少しもあらはれて居なかつたことは、到底疑を容るべきではない。

更に大師入滅後六十年の、寛平七年に書いた貞觀寺座主の贈大僧正空海和上傳記の如きに至つては、露骨に其の病死の事を明記してある。

承和二年嬰病、隱居金剛峯寺。三年三月二十一日卒。時年六十三前四十三

こゝに承和二年病に嬰り、三年に卒したと云ひ、年六十三といふのには、年數に相違がある。蓋し筆者記憶の誤謬であらう。而もなほ入定說の事は少しも見えず、最も露骨に其の死を直書してある所は、以て當時門徒の解して居つた所を見るに足るのである。貞觀寺は空海の肉弟にして、同時に法弟なる眞雅僧正が第一代の座主になつた寺で、此の人元慶三年に入寂したのであるから、元慶七年の座主は恐らく眞雅の遺弟であらふが、今其の名を明にすることが出來ない。併しながら其の傳ふる所の大師末期の事情は、毫も疑を容るべからざるものである。

斯くの如く毫頭疑ふべからざる多くの史料の存するに拘らず、大師滅後二百四十五年頃の、經範や匡房の頃に至るまでの間に、入定說は立派に出來上つて居るのである。是は抑如何なる由來のものであらうか。

三　大師入定說の由來

弘法大師が高野山の巖窟内に入定して、生身のまゝに彌勒出世の曉を待つて居るといふ思想は、無論大師の高德を偲ぶのあまりに、何時とはなく作り上げられた說であらうが、それには種々の由來のある事であらうと思はれる。

一、高野山は大師の入定處として定められた場所であるといふ事。

二、大師は死後龍華三會の曉を俟つて、彌勒出世に遇ひたいと云つて居られたといふ事

三、自然の死を待たず、生きながら身を亡つて、往生を遂ぐるといふ思想の行はれた事

此の三つの條件が綜合せられて、大師は生きながら嚴窟内に入定せられた、生身のまゝに彌勒出世を待つて居られるのだといふ説は成立したものらしく考へられる。

第一に高野山が大師の入定處であるといふ事は弘仁七年に大師が奏請して、入定處として高野山を賜はつたといふ事實から唱へられる説である。是は固より事實であるが、此の事實からして、はては其の山に於ける大師の入滅をも、つひには入定と呼ぶことになり、いつしか生身のまゝに止まつて居られるといふ思想を生ずるにも至つたものと解せられる。朝野群載に、

弘法大師請二乞入定處於高野山一表

沙門空海言。空海聞、山高則雲雨潤レ物、水積則魚龍產レ化。是故耆闍峻嶺、能仁之迹不レ休、孤岸奇峯、觀世之蹤相續。尋其所二由、地勢自爾。又有二臺嚴五寺禪客一、比二肩天仙一、一院定侶連レ袂。是則國之寶、民之梁也。伏惟我朝歷代皇帝、留二心佛法一、金刹銀臺櫛二比朝野一、談義龍衆、每寺爲レ林。法之興隆、於レ是足矣。但恨高山深嶺、乏二四禪客一、幽藪窮巖。希二入定賓一。空海少年日、好涉二覽山水一。從二吉野一南行一日、更向レ西去兩日程、有二平原幽地一、名曰二高野一。計當二紀伊國伊都郡南一。四面高嶺、人蹤絶レ蹊。今思、上奉二爲國家一、下爲二諸修行者一、芟二夷荒藪一、聊建二立修禪一院一。經中有レ誡、山河地水、悉是國主之有也。若比丘受二用地不レ許物一、卽犯二盜罪一者。加以法之興廢悉繫二天心一。若大、若少、不二敢自由一。望請蒙二賜彼空地一、早遂二小願一。然則四時勤念以答二雨露之施一。若天恩允許、請宣二付所司一、輕塵宸扆、伏深悚越。沙門空海誠惶誠恐謹言。

弘仁七年六月十九日　　沙門空海上表

といふ文がある。卽ち大師は既に年少時から高野

山の靜寂の幽境なるに着眼し、弘仁七年に於て、入定處として之を奏請し、許可を得たのであつた。こゝに入定とは、決して死去の事を云ふのではない。所謂禪定三昧に入つて、靜思默考するの意で、大師は其の後毎年入定處なる此の山へ來て、修禪の行を積まれ、更に出定しては都に歸るのが例であつた。眞濟の空海僧都傳に、

去弘仁七年、表請紀國南山、殊爲入定處。作二兩草庵一、去高雄舊居、移入南山。……供養月餘、亦居高雄。……雖云世事無際、春秋之間必一往、看其山中。

とある。

入定があれば出定がある。入定出定の語は古く相對して用ひられたもので、大師御行狀集記に引いた神泉苑祈雨の條の或記に、

大師勤修雖經七日無雨。大師入定思惟、守敏大德駈取諸龍、既入水瓶、云云 卽出定。延修二个日夜。……

とあるが如きは、明かに其の意義を示したものである。高野山が大師の入定處であるといふのも、此の意味に於ての入定處であつて、決して終焉の地の意味ではない。然るに之を入定處と云ひならはした事から、次の如き種々の思想と混淆し、何時の頃からか大師はこゝに入定せられて、龍華三會の期を待つて居られるのだと言ひ出したのである。

第二に、大師が龍華三會の期を待たれたといふ事は、當時に於て多く行はれた思想で、敢て珍らしいものではなかつた。而してそれは、御遺告の文と稱するものにも見えて居る。弘法大師行化記引遺文に、

東寺座主大阿闍梨耶者、吾末世後世弟子也。吾滅度以後、弟子數千萬之間長者也。雖門徒數千萬、併吾後世弟子也。雖不見祖師吾

顏、有心之者必聞吾名號、知恩德之山。是吾非欲自屍之上、更人之勞護。繼密教壽命、可令開龍華之庭謀也。吾閉眼之後、必方往生兜率陀天、可待彌勒慈尊御前。五十六億餘之後、必慈尊御共下生祇候、可問吾先跡。且未下之間、見微雲管下察信否。是時有勤得祐、不信之者不幸。努力々々、勿爲後疎。

とある。此の御遺文なるものはもと秘密文書で、御行狀集記には、

遺告、是大師作。二十五條緣起、付代々大阿闍梨耶、令守宗家。然者密宗之肝心、門徒之眼目也。仍從大阿闍梨之外、不可披見他人云云。

と見えて居る程の貴重なものであつた。隨つて其の當時に於て發表せられたものでなく、爲に後に大師に假托して作られたものではなからうかとの

疑を挿むべき餘地がないでもない。併しながら余輩は、今こゝに此の遺告なるものゝ眞僞を論じ、是が年代を云云するの要はない。假りに之を後の假托としても、それは未だ入定說の成立せぬ以前のものであつて、普通の入寂を豫期しての文面である。「吾滅度の後」と云ひ、「自屍」と云ひ、「閉眼の後に兜率陀天に往生す」といふが如きは、孰れも死を意味したもので、決して入定して生身のまゝに彌勒出世を待つとの意味ではない。兜率天上に往生することは肉身のまゝでは出來ない。肉體は死屍となつて四大に還原しても、よく兜率內院に往生して、彌勒に逢ひ奉り得られると考は、當時に於て存在して居たのである。法華驗記に、沙門仁鏡百二十七歲にして都率內院に往生して、彌勒に値偶したとの例話も見えて居る。然らば此の遺文なるものが、果して大師の親しく遺されたものか、或は後の假托であるかを問はず、むしろ大

師入定說の反證ともなるべきものであると言はねばならぬ。併しながら、既に大師が彌勒出世の曉に於て、都率天から共に下生するとのことを遺告したとあつて見れば、いつしかそれが入定處たるの說と合致して、大師は入定して肉身を高野に止め、靈魂は兜率天に上つて彌勒慈尊に侍し、龍華三會の時を待つて再び此の世界に下り、更にもとの肉身に戻つて出定せられるものだとの、まはり遠い說ともなり得べきものである。

第三に、平安朝の中頃には、生きながら身を燒いて淨土に往生するといふ事が屢々行はれた。既に康保年中に於て、僧長明身を燒くの事が元亨釋書にある。百錬抄には長德元年に、阿彌陀峯の身燒上人があつた事を記して、「頃年諸國燒身者十一人」とあれば、餘程流行したものと見える。此の外にもかゝる例話は、元亨釋書や法華驗記に少からず見えて居る。支那に於ては此の頃には、岩窟中に隱れて往生を遂ぐるの思想もあつた。我が長德よりも十年許後の宋の景德年間に出來た景德傳燈錄を見ると、寒山拾得の二僧が、岩石の縫中に入り、其の縫忽然として合して永く世から隱れたとの事もある。併しながら是等は共に往生の一種の方法であつて、入定ではない。身を燒いたり或は岩窟中に隱れたりしたものを以て、入定と號した例は決して古くは見えないのである。併し既にかゝる思想があり、殊に身を燒くが如き事が頻々と行はれた以上は、高野山が大師の入定處であるといふ事から、大師は巖窟中に入定せられたので、生身のまゝに彌勒の出世を待たれて居るのだとの說も、自から出で來り得べきではあるまいか。

四　結　語

後世には、生きながら自ら身を燒くものを以て火定に入ると稱し、或は生きながら土中に埋めら

れて、土定に入るといふ死の方法も物に見え出した。大隅國國分驛の附近には、眞應上人と空順上人との入定の石棺といふものが今に遺つて居る。是等は生きながら棺中に入りて、其中で弟子や信者の念佛に圍繞せられて、窒息して死を遂げたものであるが、之をも入定と云つて居る。かくてつひには、僧侶の死を入定と稱する樣にもなつた。併しながら是等は孰れも入定ではなく、自殺と葬儀とを兼ねたものである。入定とは禪定三昧に入る事で、自殺の一の方法ではない。一定の期間飲食を絶ち、靜思默考するのであつて、たとひ其の期間に制限がないとは云へ、必ず生身のまゝに存ずるものでなくてはならぬ。されば弘法大師の入定説と云ふものも、大師が生身のまゝに岩窟内に結跏趺坐して、五十六億七千萬歳の後を待つて居られると云ふのであつて、決して其の死を意味したものではない。無論火葬は之を認めないのである。而も大師は其の實病氣によつて普通の死を遂げ、其の遺骨は荼毘に附して、豫め點定したる墓所に葬られたのであつた。當時の記錄文書は固より、遺弟門徒の書いた大師の傳記にも、明かに此の趣は見えて居る。大師の御遺文と稱するものにも、普通の死の意味は見えるが何等入定の事はない。然るに爾後二百四五十年間に、斯かる明白なる史料あるに拘らず、大師の高德はよく其の入定説を完成せしめたのであつた。

（附記）貞觀寺座主の寛平七年の空海和上傳記に、大師年六十三法齡四十三とあるのは、既に述べた如く記憶の誤であらうが、貞觀十一年に出來た續日本後紀にも大師年六十三とあれば、此の頃では斯く計算せられて居たものかと思はれる。或は前の數へ方の誤を正したのであつたかも知れぬ。